

子どもたちといっしょに

# 「おおきな木」 シェル・シルヴァスタイン さくえ ほんだ きんいちろう やく (篠崎書林)

この本は子どもの成長を見つめる「りんごの木」の話です。  
まったく派手さはありません。けれども、ここには大きな愛情が満ち溢れています！ 誰かを愛す、誰かに愛されていることほどすてきなことはないでしょう。  
この「りんごの木」は人間の親と少しも変わりがありません。子どものために何が出来るか、幸せにしてやるにはどうしたらいいかと考えるのは人間の親とまったく一緒です。

愛情がどれだけ子どもの成長に大切か！ みなさんも十分にわかっていることだと思います。

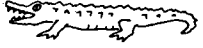
文中に「このふるばけた きりがぶが こしかけて やすむのに いちばんいい。さあぼうや こしかけて。」と、もうすっかり老人になってしまった男の子に「木」が話しかける場面があり、いくつになっても子どもは親の子どもなんだと感じずにはいられません。

小さい子だけじゃなく、中学生や高校生のお子さんにも薦めてみてください。きっと、何かを感じとってくれるはずですよ。

## 第76回読書会 「鬼の眼」 灰谷健次郎 著 (理論社他)

2月11日(日) 午前10:00～12:00 於・白根学習館 ルーム1  
人はたくさん悩みます。たくさんたくさん悩みます。けれども、悩んで考えたことによって一歩前に踏み出した自分に会えることができるのです。  
今の子どもたちに読んで欲しい本の一つです。子どもたちに薦める前にみなさんもぜひ読んで参加してください。(しろね図書館友の会) (しろね図書館 共催)

## 2月の行事

▶ 図書館主催行事報告 

1月14日(日)に白根学習館ラスパックホールで天野尚氏講演会「創造の原点、アマゾン」が開かれました。交流広場では超特大パネルの展示もあり、当日は約300人もの入場者がありました。参加していただいたみなさんにはアマゾンの世界を楽しんでもらえたと思います。ありがとうございます。  
スライドで写真を紹介しながらの楽しい話おもしろい話、そして現在の地球で起こっている状況を話していただきました。  
(パネル展示は1月31日で終了しました)

3	おはなし会 3:00～
4	絵本・物語にでてくる(日) おやつづくり 2:30～
7	(水) 絵本のじかん 3:00～
10	おはなしがど伊後 10:00～
(土)	おはなし会 3:00～
11	(日) 第76回読書会 10:00～
14	第76回読書会 10:00～
(水)	蔵書点検始 休館
28	(水) 蔵書点検終 休館

\* ブックバスは 運休します

# しろね図書館だより


発行 新潟市立白根図書館  
平成19年2月1日  
No. 81

❖ 今月の展示架テーマ 「チョコレート」  
「蔵書点検」のため、2月14日(水)～2月28日(水)まで休館します。  
みなさんには大変ご迷惑をおかけしますが、ご協力よろしくお願ひします。  
これにともなって、2月1日(木)～13日(火)まで、通常8冊・2週間の貸し出しのところ16冊・4週間の貸し出しをします。この期間に、なかなか読めなかったあの作品に挑戦してみたい方が増えるか。

## 図書館まめ知識 「蔵書点検」てなに？

「蔵書点検」は、以前の図書館の「曝書」にあたるもので、昔は本を乾燥させ、虫喰いを防ぐために陽に曝し、自録カードに浴びて1冊1冊点検をするという作業をしていました。蔵書数の少ない昔でも大変に手間だったそうです。現在では本の情報はすべてコンピューターに入力されていますが、1冊1冊点検していくことは今でも変わっていません。

しろね図書館ではこの期間にすべての蔵書127,646点(12月末現在)を点検し、正しい場所にあるかどうか(これは毎月の月末休館日にも点検していますが、とて1日だけではすべての本を直せません)、失くなったものがあるかどうか。また、切れてしまったりはずれてしまったりで修理の必要なものがあるかどうかなどみなさんにきれいな状態で気持ちよく利用してもらえるように作業します。

 としまかんからおねがい 本は、みんなのもの、大切に読みましょう!

1月の  
来館者 ----- 16,300人  
貸出冊数 ----- 12,678冊  
予約冊数 ----- 195冊  
(ブックバス利用者) 降雪期は  
(ブックバス貸出冊数) 安全の為運休

リクエスト情報 (しばらくお待ち下さい)  
1位 ハリポッターと謎のプリンス 上下 (7名)  
2位 陰日向に咲く (6名)  
3位 名もなき毒 (5名)  
4位 東京タワー (3名)  
5位 十七歳の硫黄島  
風が強く吹いている (2名)  
地

~~ 図書館員がおすすめするこの一冊 ~~

# 「いちょうやしきの三郎猫きぶろうねこ」

成田 雅子 作・絵 講談社 発行  
(E ナ)

この絵本の背表紙でタイトルだけを読むと、むかし話で、それもすこし怖いおはなしのように思えます。そう思いながら手に取って表紙をながめてみると、こちらを見つめている猫の三郎さんはエプロン姿で、しかもその後ろに描かれている「やしき」はどうも洋館のようです。タイトルの文字から受ける印象と、表紙から想像するストーリーとのギャップにページをめくっていくと、またまた意外な場面が眼に飛び込んできます。画面いっぱいのおさはらにポツンと不安げに立っている女の子。そのポケットに入れられたにぼしは、ぎゅっと握り締められているに違いありません。なぜならそれは、いなくなってしまった三郎さんを見つけたときにあげるためのにぼしなのですから…。

いなくなった猫の三郎さんを探している麻美ちゃん。ひと月ほどたったころ、いちょうの木がしげる「いちょうやしき」でやっと三郎さんを見つけます。探している猫に会えたところでお話が終わる絵本も多いなか、この本は、ここからお話が始まります。ひと月ぶりの再会は喜びの場面となるかと思うと、期待とはすこし違う方向へ話の雰囲気は流れていきます。そして三郎さんが「自分の家」だという「いちょうやしき」に入った麻美ちゃんは、いままで自分の知らなかった三郎さんを知ることになります。

「おもちゃじゃありません」「どこがすきなんです？毛の色？鳴き声？」という三郎さんの言葉に私ははっとさせられました。いままで自分に都合のいいように相手を理解したつもりになってはいなかっただろうか…。

三郎さんを理解し、「いちょうやしき」から一人で帰る麻美ちゃんにほっぺたをすりよせてくれた三郎さん。そこには様々な想いが含まれているはずです。

それまで三郎さんをクールだなあと思っていた私は、麻美ちゃんにほっぺたをよせてくれたことと、最後の“ついしん”の一言に、麻美ちゃんへの愛情を感じ、三郎さんを大好きになってしまいました。

(内山 香)

## 第七十五回読書会

平成十九年一月二十一日(日)  
午後二時、 参加者四名

### 『流星ワゴン』 (講談社)

重松 清 著

この物語には三組の親子―正確には父と息子―が登場する。語り手／主人公の永田一雄は三十八歳。彼の家族は同じ年の妻と中学一年生の息子・広樹だ。一家は東京近郊のマンションで表面上は平穩無事な生活を送っていたが、広樹は少し前から荒れはじめ、妻は妻で得体の知れない外出が増えている。その矢先リストラにひっかかってまさかの失職。いったいいつから幽霊が狂いはじめたのか。壊れた家族を前に、一雄はふと「死」を考えてみた。

もう一組は、主人公の一雄と一雄の父。裸一貫から事業を興し、土建業とサラ金業で成功した父を一雄は嫌っていた。その父も六十三歳。末期ガンを患って余命いくばくもなく、いまは郷里の病院の点滴につながれている。一雄は父の見舞いと称して月に何度か帰郷するが、それは「御車代」の名目で母から渡される旅費目当てでもあった。

そして三組目は、橋本さんと呼ばれる男性と、息子の健太くん。五年前、三十三歳のとき、橋本

さんは信州の高原を下ライブ中に運転を誤ってトラックと正面衝突、当時八歳だった健太くんともども即死したのだ。

物語は、この橋本親子のワゴン車に一雄が同乗し、過去へタイムスリップしていく。

#### ☆☆ 参加者の感想 ☆☆

☆黒一色の表紙と題名に吸い寄せられるようにページを開き、そして一気に読んでしまった。

☆この物語には、三組の「父親」と「息子」が出てくる、それぞれ事情は違っているが、どの父親もみな息子のことを愛している。しかし、息子は父親を嫌う反抗する時期がある。これは「息子」だけじゃなく「娘」にもあって、「親」と「子」は必ず経験することなんだろうと思う。「親子」は、どんなに喧嘩しても、いつとき嫌いになっても「親子」であることは変わらないので、時間の流れが解決してくれることもあるが「夫婦」はどうだろう、一度入った溝を完全に埋めることは、可能なだろうか。難しい気がする。最後に、一雄は美代子とやり直す決心をするが、その先はどうなるのだろうか…。うまくいくのだろうか。

☆死んだ人が、自分の目の前に現れ、過去に連れ戻してくれることなど現実にはありえないのだから(でも、もしかしたら、あるのかな…)この物語

は、ファンタジー？ 幻想的なんだけど現実的。

☆過去に戻って、自分の行いを変えたかったがそれは不可能であった。

☆現在の世間では、子供に甘い父親が多いが、自分たちが子供の頃は厳しい父親が多かった。

☆父親の病気がガンだと言うことを、本人へ告知をするべきかいなかは、子供の楽なほうにすれば、親はそれでいいのだと作者は語っている。

☆この物語の最後の終わり方がハッピーエンドに向かっていく方向なので安心した。

(星島 等)

\*\*\*\*\*

今回の読書会は二月十一日(日)午前十時、

「兎の眼」 灰谷健次郎 著 (理論社他)

本日の教育とは何か？

新任女教師小谷先生の荒廃した教育現場での奮闘記です。

本はカウンターに用意してあります。

皆さんのご参加をお待ちしています！